



尺取虫
男



川崎ゆきお

木下は元気のない友人の蛭田を訪ねた。最近電話をしても、すぐに切るし、呼び出しても出て来ない。神経か体調でも悪いのではないかと心配した。実際には好奇心半分だが。

「いきなり来て悪かったなあ」

「ああ、いいよ」

「蛭田君、最近元気がないようだけど、どう」

「ああ、悪い悪い」

「それは大変だ。どこが？」

「どこって？」

「悪い箇所」

「頭は元々悪いけど、体調も悪いねえ」

「それはいけないなあ」

「まあ、ボディーがしんどいと、元気もないよ。食欲もないし」

「それは大変だ」

「しかし……」

「え、何？」

「規則正しい暮らしが出来ようになった」

「ほう」

「無理をすると辛いからねえ。慎重に暮らしている。すると、寝る時間も起きる時間も安定した。いつもは無茶苦茶だったからねえ。それで体調を崩したんだと思う。食事と同じ時間にきっちり食べる。コンビニ弁当や牛丼やカレーはやめた。自分で煮炊きしている。最近は梅干しを毎日食べてる」

「健康的な生活じゃないか」

「不健康だったから、戻しただけだよ。でも、今までそんな暮らしぶりをしていなかったから、新鮮だよ」

「まあ、入院したと思えばいいんだね。それで部屋でじっとしてるわけ」

「いや、散歩に出る。いつもはスクーターで、うろうろだったけど、最近は歩いてる。これはリハビリなんだ。散歩じゃない」

「ほう」

「それで、今までより仕事もよくやるようになったよ」

蛭田はネットを利用したアウトソーシングで内職をやっている。

「じゃ、元気じゃないか」

「不思議だね。元気のないときほど元気なんだ」

「うーん、何だろう」

「出来ることをゆっくりでいいから、こつこつやっているだけだよ。これを尺取虫作戦と呼んでいるんだ」

「確かに動きが遅いねえ」

「見たことある？」

「蛾の幼虫だろ。体を縦に丸く曲げて、その分だけ移動する」

「身の丈にあった高さから前が出る」

「あ、そうなんだ」

木下が期待したほど、蛭田は悲惨な状態ではなかった。体を壊し、神経でもやられているのかと思ったが、冷静だ。

「治ったらどうする」

「体調がかい」

「うん」

「困るなあ」

「どうして」

「また、遊んでしまうし、生活も崩れるさ」

「そんなものか」

「きっとね」

了